ベルクソンにおける創造性の理論

藤　井　奈津子

はじめに

創造性とは一般にこれまでになかった新しいものを生み出す能力とされている。創造性といわれれてわれわれが普通思い浮かべるのは、ベートーヴェンやゴッホ、ニュートンなどの偉大な芸術家や科学者たちにみられる創造性だろう。たしかに、彼らの創造活動は、文化的・社会的に新しくて価値あるものをもたらしたことから、多くの人々に賞賛されてきた。しかしもちろん、創造性はそのような卓越した才能の持ち主だけの特権ではない。芸術作品や科学的発明とまではいかなくても、日常生活において、われわれはたえずなんらかの改良や工夫を重ねているし、小さな創作や発見をしてもいるだろう。また、われわれの人格はたえず新しい経験の蓄積をもって築かれていくのだから、われわれの人格の各瞬間はつねに新しいものである。その意味で、われわれは誰でも、たえず自分自身を創造しているということができよう。そこでわれわれは、創造活動を、芸術や科学に限定して捉えるのではなく、個人にとっての新しい経験をも含めた広い意味において捉えておこう。つまり創造性とは人間形成の本質であるのだ。したがって、人間形成を論じる教育学において、創造性の議論は欠かすことのできない重要な問題であるということができる。

しかしながら、教育学の領域において、創造性についてはこれまでにもさまざまなところで触れられてきたものの、創造の過程そのものについてはあまり深く議論されてこなかったように思われる。そこで本稿では哲学者アンリ・ベルクソンの思想を検討することによって、創造過程の本質を明らかにしてみよう。ところでベルクソンにおいて、実在はたえず変化し新たなものを生み出し続ける流れであるので、そこでは移り変わらない輪郭や形態などは想定されない。つまりベルクソンにおいては原始的な要素的単位の存立は排除され、すべては全体の流れの中での推移になるのである。そこでは、いつも流れである全体の中から個々の形態がどのように浮かび上がってくるのかが問題となる。ここで重要なのはベルクソンのい

う全体が決して閉じることのないどこまでも開かれた全体であるということである。それは個人や社会を超え、無限の宇宙へと開かれているものなのだ。そしてベルクソンにおいて創造とは、このどこまでも開かれた全体を前提にして行われる。

このようなベルクソンの考え方によって、われわれは創造性について行為のレベルだけではなく、人格のレベル、さらには生命のレベルをも一貫して説明することができるはずである。その意味で本稿は、ベルクソンの主要4著作（『意識に直接与えられたものについての試論』『物質と記憶』『創造的進化』『道徳と宗教の二源泉』[1]）を検討していくことによって、ベルクソンの思想を創造性の視点において再構成することをめざすものである。

1　持続と創造性

第1著作『試論』においてベルクソンが問題にしたのは、われわれの意識の諸状態をどのように捉えるかということであった。ベルクソンによると、われわれの意識の本質とは持続（durée）である。持続とは、メロディを構成する諸々の音の連なりのように、たえず変化しながらも区切られることのない異質的な連続性のことである。それは諸要素が相互外在的に並置される空間とは異なる性質のものだといえよう。ところが、われわれの常識は、このような持続である意識の状態をたえず空間化して捉えようとする。たとえば、われわれが悲しみにうちひしがれているとき、その悲しみはずっと同じ悲しみのままあるわけではなく、いつしか苦しみのほうへ傾いていったり、次第に怒りを入り混じらせたりしているだろう。このようにわれわれの意識とは、本来空間のように分節化できるものではなく、言語化しえないものである。しかしわれわれの常識は、このような意識の漸進的諸変化を「悲しみ」や「苦しみ」の一言でかたづけようとするのだ。

それでは、なぜわれわれはこのような内的な持続を分割可能なように考えるのか。それはわれわれの自我に深さの程度があるからにほかならない。ベルクソンによると、われわれの自我は表層と深層の二つに分かれる。表層の自我は、社会的状況に適応するためにいろいろな観念や感情が分割されて並置される自我である。したがってそこでは、ある心理的状態はそれに先立つ心理的状態によって必然的に決定されるという決定論的説明が可能となるだろう。しかしベルクソンによると、それは本来持続である意識の流れを空間内に並置させ、その始め（原因）と終わり（結果）を結びつけることにすぎない。それはまさしく持続の空間化であるといえよう。

一方、深い自我はいろいろな観念や感情が相互に浸透し合っている持続する自我である。

そこではわれわれが過去に経験したさまざまな観念や感情が、現在の状況と入り混じり浸透し合う中から、不意に一つの決定が導き出されるだろう。したがって、このときわれわれは、表層の自我のように、いかなる原因にもとづいて自分が決定を下したのかをはっきりと答えることはできない。なぜならそのとき果たされた決定は、あえていうならば、われわれの人格全体から発された決定であるからだ。

ベルクソンはこのような決定の中に人間の自由をみる。したがって彼の自由についての考えは、決定論に対置する主意主義の立場とも異なっている。主意主義者は、ある選択がなされたとき、別の選択肢を選べることもできる自由があったと考える。つまり決定論者とは違って、複数の選択肢の可能性を主張するのである。しかしベルクソンによると、主意主義者が別の選択肢もあったというとき、それはある選択がすでに果たされてしまったあとに別の選択に身を置いて、二つの選択肢を空間内に並置しているにすぎない。結局ここでも持続の空間化がみられることになるだろう。

要するに、ベルクソンにおいて持続的な流れの上で見出される行為（決定）とは、決定された事象の連鎖を辿るもの（決定論）でも、あるいは可能ないくつかの途のあいだの選択（主意主義）なのでもない。ベルクソンにおいて持続とは、必然性にも可能性にも支えられない予見不可能な創造性であるのである。そして、このような持続のもとで見出される行為こそが、ベルクソンが自由と名づけるものなのだ。したがって、われわれが深い自我の真の持続に身を置くならば、われわれはつねに自由であり、われわれはつねに自分自身を創造しているということができるだろう。ここにわれわれは、ベルクソンの哲学を〈自由＝創造〉のテーゼのもとに位置づけておきたい。

2　記憶と創造性

『試論』において、われわれの意識とはたえず変化しながらも区切られることのない持続的な流れであった。すなわち、われわれの意識とは、未来をかじって膨らみながら進んでいく過去の連続的な進展である。われわれの過去とは無限に増大し、無限に保存される。そしてこのような過去は、われわれの推進力として、傾向という形で、われわれに対して全面的に姿を現す。つまり、ベルクソンにおいて持続（意識）とは記憶であるのだ。そこでベルクソンは、第２主著『記憶』において、『試論』で導き出された持続の〈自由＝創造〉のテーゼを、記憶理論によってさらに展開していくことになる。

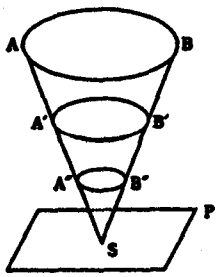
『記憶』においてベルクソンは、われわれの知覚について語ることから始める。その際、

ベルクソンは、眼を開ければそこに現れ、目を閉ざせば見えなくなるもの、しかし依然としてそれがそこに存在することを疑わないものを知覚の前提に置いた。そのような「物」をベルクソンはイマージュ（image）と呼ぶ。ベルクソンによると、宇宙はイマージュの総体（物質的世界）であり、その宇宙にあって特別のイマージュである私の身体は、みずからを取り囲むすべてのイマージュを行為に向けて規定し選択する。このとき生まれるものが知覚である。つまり知覚とは、イマージュの総体の一部である私の身体が、イマージュの総体から、みずからに関与する事象のみを選択的に浮かび上がらせ、残りを暗闇の中に沈めてしまうような働きなのである。

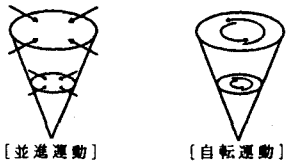
しかし、実際には、このような知覚とは権利上のものであるといわなければならない。なぜなら、知覚とは実際には時間の中で展開されるのだから、そこではいつもなんらかの記憶が介入すると考えられるからである。したがって、記憶が全く介入していない知覚をベルクソンは純粋知覚（perception pure）と呼ぶ。それでは記憶（過去）とはどのように知覚（現在）に関わっているのだろうか。

ベルクソンによると、現在と過去は連続する二つの時間を示すのではなく、共存する二つの要素を示している。すなわち、現在はどの瞬間も繰り広げられると同時に二つの噴流に分かれる。その一つは未来に突き進み、もう一つは過去へ落ちる。言い換えれば、それは一方において知覚であり、他方において記憶である。このように過去（記憶）はあたかも現在（知覚）の影のように、あるいは鏡に写し出された像のように現在と並んで現れる。しかし、現在と過去は共存して現れるだけではない。「過去はそれ自体を保存するので（現在は過ぎていくが）――それぞれの現在と共存するのは、全体としての、統合的な過去であり、われわれのすべての過去である」[2]。つまり、われわれは現在のうちにつねに過去の全体を潜在的に背負っているというのだ。このわれわれが潜在的に背負っている過去の全体を、ベルクソンは純粋記憶（mēmoire pure）と呼ぶ。

さて、知覚において、われわれは潜在している過去の全体（記憶の全体）の一部分を現実化する。この様子をベルクソンは円錐体の図を使って説明する。平面Ｐはイマージュの総体である。平面Ｐと重なる点Ｓは刻一刻と進んでいる私の現在（純粋知覚）であり、そこにはイマージュの総体の一部である私の身体イマージュが凝縮している。Ｓを頂点とした円錐体ＳＡＢの底面ＡＢは、私の現在が潜在的に背負っている過去の全体（純粋記憶）である。



現在の知覚（S）の呼びかけに応じて、われわれは記憶の全体のうちのある断面（A′B′、A″B″など）を現実化し、それを現在の知覚に覆いかぶせる。ところでこの記憶内容のそれぞれの断面は、過去の特定の要素（記憶イマージュ）を示しているのではなく、過去の全体を多かれ少なかれ収縮した状態で含んでいるものである。したがって、個々の記憶イマージュが現実化されるには、それぞれの断面においてさらに二つの同時的運動（並進運動と自転運動）がなされなければならない。こうして純粋記憶が収縮し、純粋知覚が制限されて、知覚が成立する。さらにそれが現在の感覚―運動機構の活動に収斂するとき、行為が成り立つといえる。



それでは上記の知覚―記憶のしくみに従いながら、われわれの認識の過程について詳しくみていこう。これまでみてきたように知覚にはつねに記憶の介入が認められる。したがって、ベルクソンにとって認識（reconnaissance）とは、その文字の成り立ち通り再認のことである。ところでベルクソンによると、この記憶の介入の仕方には二通りあり、それによって認識は、自動的な認識（reconnaissance automatique）と注意的な認識（reconnaissance attentive）とに分けられる。

自動的な認識から始めよう。たとえば、われわれは初めての街を訪れたとき、街角ごとにどこへ行くのかわからなくてためらうのに対し、一方、長年住んでいる街であれば、街をほとんど意識することなく機械的に歩き回ることができる。この違いは何か。ベルクソンによると、これは知覚に随伴する身体運動に関係がある。前者においては、知覚はまだそれに伴う明確な運動を組織していないが、後者においては、この知覚に伴う運動が私の知覚を無用にするところまで組織されているというのだ。つまり、われわれが慣れ親しんでいる日常の情景においては、認識は身体の瞬時の反応系に組み込まれており、そこでの記憶は、記憶に照らされた習慣、身体化された記憶ともいうべきようなものになっている。われわれの習慣的な認識は、このような身体運動に埋め込まれた記憶を基礎としているのである。ベルクソンは、このような生まれつつある筋肉感覚としてわれわれの意識の内に展開される構図のことを運動的図式（schēma moteur）と呼んでいる。

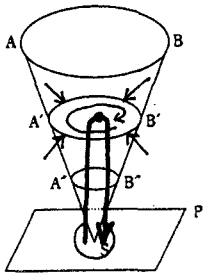
一方、注意的な認識においては、このような身体化された記憶に加えて、本来的な意味での記憶の介入が認められる。そこで、われわれが物事を理解するときを考えてみよう。たとえば、難しい本を読んだり難解な話を聞いたりするとき、われわれは知覚した語を頼りにして、その語によって暗示される多少とも抽象的な観念の領域へ身を置き、そこからわれわれ

は考えた意味をたずさえて、再び知覚した語に戻っていくことがわかるだろう。このように、読む文句の中でわれわれが見ているもの、発音された文句の中でわれわれが聞いているものは、われわれがそれに対応する観念の領域に入っていくのに必要なだけのものである。つまり、われわれはある抽象的な観念から出発して、それから想像においてその観念を仮説的な語に質料化し、それらの語をわれわれの見たり聞いたりするものの上に重ねようとするのだ。したがって物事を理解するとき、われわれは単語から観念へと進むのではない。われわれは、仮説的に想定され再生された観念から出発して、そこから実際に知覚された単語へと下降するのである。つまり注意的な認識には観念からイマージュへの働きがある。観念とは、イマージュに展開しうる記憶の要素が互いに浸透し合っている全体的な表象である。ベルクソンはこの全体的な表象のことを力動的図式（schēma dynamique）と呼んでいる。

それでは運動的図式と力動的図式はどのような関係にあるのだろうか。そこで両者の関係について、『記憶』よりも踏み込んで書かれてあるベルクソンの論文「知的な努力」[3]を参照することにしよう。ここではダンスの習得の過程が次のように述べられている。

われわれがダンスのような複雑な運動を習うにはどうするだろうか。まずダンスを見ることから始めるだろう。たとえばワルツを覚える場合ならば、ワルツの動きが目で知覚される。この知覚をわれわれは自分の記憶に委ねる。それから、われわれは、記憶に保存した印象に似たような動きが、足でできるようになることをめざすだろう。ところが、ダンスを覚えるためには、それを見ることから始めなければならないが、一方で、幾分かすでに踊る習慣をもっていなくては、そのダンスの細かな点を、またその全体をも見ることができないということはまったく明らかである。つまり、ワルツのような複雑な運動の習慣をつくるためには、ワルツを分解して得られる運動の要素をすでに習慣 ── 運動的図式 ── としてもっていなければならない。事実、われわれが普段歩いたり、つま先で立ったり、体を回転させたりするときに行う運動が、ワルツを覚えるときに利用される運動であることはすぐわかることだ。しかし、それらをそのままで利用することはできない。それらを多少とも変化させ、おのおのをワルツの一般的な運動の方向に曲げ、とくにそれらを新しく組み合わせなければならない。だから一方には、新しい全体の運動を表象する図式 ── 力動的図式 ── があり、他方にはその全体の運動が分析された要素と同一な、あるいはそれに類似した前からできる運動のキネステジックな（運動感覚的な）イマージュがある。ワルツの習得は、これらのすでに古いさまざまなキネステジックなイマージュを、それらが一緒に図式の中へ入り込めるように新しく組織づけるところに成り立つ。だが、もっとも図式はそういう作用を通じて、不動な

のではない。図式そのものも自らを満たすべきイマージュによって変化を受ける。こうしてダンスの習得の過程には、図式が複数のイマージュをだんだんとそれら相互の間の新しい生き方に導くこと（イマージュの図式への適応）が必要であり、また図式をイマージュに展開できるようなものに変えること（図式のイマージュへの適応）が必要であることがわかる。しかし、重要なことは図式からイマージュへの働きがあることである。



つまり、ダンスの習得の過程において、運動的図式とは、知覚された対象に対する有益な反応運動を描かせる構図であると同時に、そこから喚起される無数の記憶イマージュを引き寄せる空の容器のようなものでもある。この空の容器にはまり込もうとしつつ、われわれの記憶内容は一種の緊張を強いられるのであるが、その状態が力動的図式であるといえる[4]。そしてこの力動的図式からイマージュへの働きにおいて、運動的図式へ向けて記憶イマージュが現実化されるとき、旧来の運動的図式は新たな運動的図式へと改変される。ここにダンスの習得がなされたのだ。ところで重要なのは、こうした理論モデルが何かを理解しようとする際の、また何かを習得しようとする際の、ひいては何か新しいアイデアを創出しようとする際のあらゆる創造過程に拡張できるということである。つまり、ここでわれわれは、創造というのはまさしく発想の全体が力動的図式として与えられること、またその図式をイマージュに変えるところにあることを認めなければならない。

要するに、「閉じた状態にあるイマージュを開かれた状態にするのが（力動的）図式である。イマージュが出来合いの静的な状態で私たちに示すものを図式は生成として動的に提示する」[5]。すでに輪郭の固定した運動的図式だけに働きかける人は、ただ過去の経験をそのままやり直すことか、過去の経験をモザイクのように組み換えることだけしかできないだろう。しかし過去の経験を現在へ新たに組織化することのできる人は、運動的図式のほかに力動的図式の働きを必要とする。旧来のパターンは記憶の全体へと開かれることによって、新たなパターンへと改変されるのである。

さてこのように、われわれの意識は、表面で唯一の平面に展開するほかに、深いところで一つの平面から他の平面に移る働きがある。つまりここでいう図式からイマージュへの働きとは、『試論』で述べた深い自我から導き出される決定のことにほかならない。このように、われわれは過去を記憶する能力によって、ますます多くの経験を保持してこれを現在と組織化し、より豊かで新しい決断をしていくことができる。しかしそれだけではない。記憶にお

ける多くの経験を現在と組織づけることによって、われわれはさまざまな行為を新たに創造することができるのである。要するに、ベルクソンにおいては、記憶をより多く保持しつつ、より多様な仕方で収縮させ、現在に凝縮させるほど、行為の不確定性が確保され、より大きな自由が、そしてますます多くの創造が実現されることになるのである。

3　生命と創造性

これまでの議論によると、われわれの意識とは持続であり、それはすなわち記憶であった。一方、記憶に対する物質とは、先行する瞬間が後にくる瞬間に残す記憶内容が収縮しきってしまい、たえず再生する現在だけでできているような存在のことであったといえよう。しかしだからといって、物質にまったく記憶が存在しないというわけではない。なぜなら、物質を分解してみると、そこには無数の振動があり、これらの振動はすべて切れ目のない糸で結ばれて、相互に連携を保ちながら、ちょうど戦慄が走るようにあらゆる方向に広がっているからだ。このように物質はその根底に、事物そのものの莫大な過去の周期をもっている。だからベルクソンによると、物質が過去を覚えていないということは、物質が過去をたえず反復しているということを意味するのである。つまり、物質の過去は、物質の現在のうちに完全に与えられているのだ。このように、物質が展開する一連の瞬間はどれも直前と同じであるため、われわれは物質に、容易に過去の連続性（持続）を認めようとしない。だが実際には、きわめてかすかで、ほとんど消え入るばかりではあるが、物質にもやはり持続があり、決して無持続というわけではないのである。要するに、物質とは持続のリズムが弛緩し停滞している状態にほかならない。したがって、物質的存在は持続の弛緩の方向に傾いており、意識的存在は持続の緊張の方向に傾いているということができるだろう。そしてここからわれわれは、物質と意識は、互いに異なる二つの性質なのではなく、同一の持続が示す緩急のリズムにすぎないということがわかるのである。

ここにわれわれは、「われわれの意識、生命体、物質的世界を含むすべてが参加する唯一の時間、唯一の持続だけがある」[6]という、ベルクソンの持続の一元論を唱えることができるだろう。つまり、ベルクソンによると、持続の弛緩と緊張のあらゆる段階が唯一の持続の中に共存して、一つの全体を構成しているというのだ。このように宇宙の中にはさまざまな過去の水準、さまざまな持続のリズムが入り混じりながら共存している。したがって、われわれは宇宙とは充満する潜在的な持続の全体であり、すべての多様性を含みそれを現実化（分化）させる唯一の記憶であるということができるだろう。

第3主著『進化』において、ベルクソンはこのような唯一の記憶ともいうべき生命の躍動（élan vital）を進化の根源においた。それは生殖細胞から生殖細胞へと伝わってゆく生命の内的推進力である。この生命の根源的躍動と、その前進途上で出会う物質との抵抗力に導かれて、生命はさまざまな種や個体へと分化していく。こうして生命はまず植物と動物に分化し、ついで動物は本能と知性という二つの能力に分化した。それでは、植物と動物とを区分するものは何であろうか。ベルクソンによると、それは両者の運動性に関わっている。植物は、自己保存の活動である栄養摂取と生殖を、さしたる運動をせずに行うことができる固着的なものであるのに対し、一方、動物は、運動をなさないならば自己の生命の保持すらできない可動的なものであるというのだ。ではこの運動性の違いは何を意味するのだろうか。可動的であるとは、生命が一つの環境を受容し続けることから抜け出して、多様な場面に自己を置きうることを示すだろう。つまり可動性とは、生命の動きに不確定性を、すなわち自由をもたらすものである。

ところで重要なことは、こうした運動性の展開に従って、意識が成立してくることである。「可動性と意識とのあいだには、一つの明確な関係がある。……神経系が発達するにつれて、それの選択しうる運動は、ますます多種になり、的確になる。またそれらの運動にともなう意識も、ますます明瞭になる」[7]。つまり、ベルクソンは神経組織の発達過程と意識の成立過程をパラレルに考えている。したがってここでいう行為の不確定性とは、前節で述べた意識性（記憶力）との関わりにおいて考えなければならない。

さて、動物が進化していくにつれて、さらに本能と知性への分化が起こる。それでは今度はこれらは何によって区分されるのであろうか。ベルクソンによると、それは対象への関わり方に関係する。本能にあっては、生の行動は、その目的や対象の性質と密着しておりほとんど区別することができない。たとえば、蟻の働きが巣の性質をつくるのか、巣の性質が蟻の働きを決定しているのかに答えることはできない。このように、本能は環境の中においてみずからに必要な特定の対象の一切を捉えることができる。しかし、もはやそれ以上は何も探求しないため、その能力の範囲は限られている。一方、知性は、物そのものではなく物と物との関係を知り、その関係を一般化する能力である。そのため、知性はさまざまな対象をほとんど際限ない観点から分析することができる。つまり、本能は、自己の生に結びついた対象のみを扱う（素材の認識）が、知性は自己の生とはほとんど無縁ですらある対象に向けても働きかけることができる（形式の認識）のだ。したがって、知性は自己の行動範囲を増幅させ、行為の不確定性をますます高めていく役割を果たすといえる。

このように、進化するに従い、生命の動きにはさまざまな選択の余地、つまり不確定性がもたらされ、またそれに伴って意識も明瞭になる。したがって、生命は進化するほど行為の不確定性を高め、より自由な生を生きるということができるだろう。

こうして進化は人類の知性において頂点に達した。しかし、知性の機能は諸関係を打ち立てることにあるから、対象を何らかの任意の法則に従って分解し、それらを何らかの任意の体系へと再構成しうる空間の観念を前提としている。すなわち、知性は、無機的な物体を対象とし、連続性ではなく非連続なものを表象し、運動性を不動性において把握するような形式のもとにあるため、流れである実在そのものに対立し、その特性を抹消するような本性をもち合わせることになる。したがって、知性のみを使用し、本能的な生の存立を無視するならば、われわれは決して実在そのものを捉えることはできないだろう。このことをベルクソンは次のように述べている。「知性だけが探求しうるような事物がある。けれども、知性は、自分だけでは、決してそれを発見しないであろう。この事物は、本能だけが、それを発見するだろう。けれども、本能は決してこの事物を探求しないであろう」[8]。

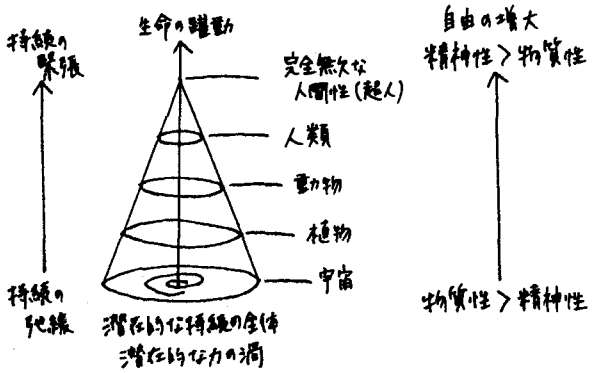
このように、知性も本能もそれ自身では、進化のさらなる飛躍を遂げることはできない。それでは生命の躍動はここで停止してしまうのであろうか。ベルクソンは次のように述べる。「完全無欠な人間性があるとすれば、そこでは意識活動のこの二形態がともに十分な発達段階に達していることであろう」[9]。つまり、人類がさらなる生命の飛躍を推し進めるには、知性だけでは十分でなく、知性はみずからに潜在している本能を呼び起こさなければならないだろう。しかし、それはもはや自己の生に釘づけになっている本能ではない。知性から呼び起こされた本能をベルクソンは直観（intuition）と呼ぶ。「ここで直観と言うのは、利害をはなれ、自己自身を意識するようになった本能のことであり、その対象について反省するとともにこれを無限に拡大することのできる本能のことである」[10]。知性は空間の観念を前提にしているため、予見不可能なもの、すなわちあらゆる創造を退けるが、「直観は、生命の本来の領域、相互浸透としての、無限につづく創造としての生命の領域に、われわれを導き入れるだろう」[11]。

ところで、ベルクソンにおいて、生命の躍動によって進化してきた生命体はすべて、その内部に根源の躍動を保有している。したがって、生命が植物と動物に分化し、動物が本能と知性とに分化するとき、それぞれの分枝はそれにかかっている雲のようにその生命の全体を伴ってくる。たとえば、植物にはごくわずかの動物性（たとえば食虫植物）が、動物にはごくわずかの植物性（たとえば寄生虫）がみられるし、知性には本能の量が、本能には知性の

星雲が取り巻いている。つまり、植物と動物という傾向、また本能と知性という傾向は、最初は互いに浸透し合っていた中から分化したのであるが、両者の間で完全な分裂が起こったのではなかった。それは両者の割合の差異において分化したのである。ベルクソンはそのことについて次のように述べる。「他の大部分の生命現象のもつ本質的な諸性格を原基的な状態で潜在的にか実質的にか含んでいないような生命現象は、ほとんど一つも存在しない。ちがうのは、割合の点においてである」[12]。このように根源的生命のもつ全体性は差異化の線に従ってさまざまに分化するのだが、しかしそれぞれの線においてそれらはその全体性を潜在的に残しているのである。

それではこの全体性とは何か。それは創造を限りなく反復させる宇宙の記憶ともいうべきものにほかならない。そこでわれわれは、生命進化を、宇宙という一つの巨大な記憶の円錐体が、そのおのおのの断面を反復しながら、さまざまな持続のリズムをもつ形態を現実化していく過程であると考えてみよう。

ここでわれわれは『記憶』で用いた円錐体のモデルを『進化』に転用してみよう。円錐体の底面には、潜在的な持続の全体である宇宙の記憶が置かれる。この円錐体には、われわれの個々の記憶の場合と同様に、共存する過去の諸水準があり、無数の記憶の断面が存在する。現実におけるわれわれのさまざまな行為のための認識が、それぞれわれわれの潜在的な記憶の諸水準に対応して遂行されるように、生命進化において行われるさまざまな種や個体への分化は、宇宙のもつ潜在的な記憶の諸水準に対応して成し遂げられるのである[13]。



ところで先にみたように、生命とは進化するにつれて、意識性を強め、行為の不確定性を高めていく（自由になる）ものであった。そのため、この記憶の円錐体は、『記憶』の円錐体とは反対に、物質性が記憶の底面に置かれ、頂点に近づくにつれ精神性（意識性）が強まることになるだろう（ただし生命は割合の差異において分化するのであったから、それは物質性＞精神性から物質性＜精神性へという過程になるだろう）。つまり、生命の躍動は持続

の弛緩から持続の緊張へと進んでいくのだ。したがって、生命にあえて目的があるとするならば、それはつまりみずからの持続する生命においてさらに持続の緊張度を高めていくこと（自由を深めていくこと）であるに違いない。

4　社会と創造性

これまでの議論により、個人の〈自由＝創造〉は、生命の〈自由＝創造〉を根底にしていることが理解できた。ところで社会の中に生まれ、社会の中で生活せざるをえない人間は、つねに社会の成員間に共通の行動様式を内面化することを強いられる。つまり、生命と個人の間にはつねに社会が存在するのだ。ところで生命の躍動はたえず更新する創造の力であって、それは動そのものであるのだが、個々の種（社会）はみずからを維持するのに静的な安定性を求める。したがって、すべての種（社会）は運動の停止である。それらは一陣の旋風に巻き上げられた塵埃の渦のように、生命の大きな息吹に煽られて、その場で旋回しているだけなのだ。そうするとそのような社会において、個人の〈自由＝創造〉はありえないことになるだろう。そこでベルクソンは、晩年の大著『二源泉』において、社会の次元における〈自由＝創造〉の問題を取り扱うことになる。

これまでみてきたように、物質の中に新たな自由の領域を拡大し続けるのが、生命の基本的傾向（生命の躍動）であった。この傾向はやがて本能と知性とに分化し、これらの能力は二つの生物種がつくる異なった社会において、それぞれ極限まで進んだ。一方は膜翅類の本能社会であり、他方は人類の知性社会である。どちらにおいても種は群居（社会）によってみずからを存続させてきた。なぜなら、それらの種の成員である個体はおのおのだけでは無力であり、社会によって保護されねばならなかったからだ。社会とは一つの組織体であり、秩序を必要とする。よって社会はその秩序を維持するための責務を個体に要求する。個体は社会が解体するとみずからの生存を脅かされるので、それらの責務を遂行するだろう。このように「責務は、その起源において、個人的なものと社会的なものとを相互に区別しえないある事態を含んでいる。それゆえに、責務に相応ずる態度は、自分自身に回帰する個人および社会の態度である」[14]。このような責務の体系は、社会と個体の維持と安寧をめざしているのであり、個体成員に課せられる責務は社会を超えて広がることはない。それどころか他の社会を潜在的に敵視し、他の社会に対してみずからを防衛することで、社会はその凝集力を強めてさえいる。したがって、このような責務の体系によってできる社会を、ベルクソンは閉じた社会（sociétés closes）と呼ぶ。膜翅類の本能社会も人類の知性社会も、結局のとこ

ろ、種の保存をみずからの目的としており、種の旋回運動に閉じ込められたままである。

しかし人類は、このような閉じた社会の中で、いつまでも旋回し続けているわけではない。前節で述べたように、本能と知性のわずかな間隙において直観と呼ばれる第三の能力が現れる。生命進化の最も進んだ人類だけが、この直観によって、生命の根源へと遡り、そのすべてを生み出す創造的な推進力に触れることができるのだ。しかしそれは原理的には誰にでも可能なはずではあるのだが、現実には卓越した直観力をそなえた神秘家あるいは意志の天才と呼ばれる特権的な個人を待たねばならなかった。彼らは直観によって生命の根源へと向かい、生命そのものである愛の躍動（élan d'amour）によってわれわれの閉じた社会を突破する。ところでこの愛の躍動は生命の躍動と別のものではない。生命の躍動が特権的な個人を通してその創造的機能を発現する場合、それを愛の躍動と呼ぶのだ。神秘家たちの愛の躍動は閉じた社会を横切って、魂から魂へと他の多数者に伝わっていく。このようにして閉じた社会が突破されていく先にみえる社会を、ベルクソンは開いた社会（société ouverte）と呼んだ。

閉じた社会と開いた社会は同じ次元には属していない。しかし、われわれはこの二つの社会の本質的な差異をつねに曖昧にしてきた。たとえばわれわれは、家族愛・祖国愛・人類愛といった三つの感情を、次第に拡大しつつより一層多くの人数を含むようになる同一の感情とみなしている。しかし、はじめの二つの感情と第三の感情との間には、本質的な違いがある。はじめの二つの感情は自分を惹きつける対象の上にまっすぐに身を置くが、それはその他の対象を排除することをも意味している。したがってそこでは感情は閉じられている。第三の感情はそうした対象の限定をめざさない。それは家族や祖国に対する愛のように対象によって規定されず、万物に無限に広がっていく。その過程でたまたま人類に結びつく場合に、それが人類愛と呼ばれるにすぎない。この感情は、人類よりももっと遠くへ突き進み、人類を超え行くことによってはじめて人類に到達するのだ。そしてこのような感情こそが、ベルクソンが創造的感情（émotion créatrice）と呼ぶものにほかならない。

要するに、家族愛・祖国愛（閉じた社会）と人類愛（開いた社会）との間にはある飛躍がなされなければならない。ベルクソンは次のように述べる。「社会の連帯から人類の兄弟愛へと進んでゆく場合、われわれはある種の自然とは別れることになるが、全自然と別れるのではない。われわれは、スピノザの表現の意味を少し変えて、生まれた自然からわれわれが離れるのは、生む自然へ帰るためなのだ、と言いうるであろう」[15]。このようにベルクソンがスピノザの言葉を借りて、所産的自然（生まれた自然）から離脱し能産的自然（生む自然）

へ復帰せよというとき、それはわれわれ人類種の記憶の平面から離脱し、すべてを生み出す宇宙の記憶の平面へと戻って、そこから新たな種を現実化せよということであるだろう。したがって、ベルクソンにおいて神秘家たち一人一人の出現とは、ただ一つの個体からなる新しい種の創造のようなものである。そしてそうして創造された神秘家たちみずからが体現し、われわれに伝える愛の躍動＝創造的感情とは、すべてを生み出す宇宙の記憶、すなわち生命の創造的努力との一致の感情なのである。だから、われわれは彼らの呼びかけ（appel）を通して、根源的生命の呼びかけを聞くのだといえよう。そしてこのようにして広がる創造者たちの社会こそが、ベルクソンの述べる開いた社会なのである。

さて、二つの社会を区別したあと、ベルクソンは次のように述べる。「教育者に開かれた道は二つある。その一つは躾の道 ── この言葉をその最も高尚な意味に解して ── であり、今一つは神秘的生の道 ── 前者とは逆に、今度はこの語を最も控えめな意義に解して ── である」[16]。ベルクソンの述べる躾の道と神秘的生の道とは、上にみた閉じた社会と開いた社会の区分に即したものである。そこで最後にわれわれはベルクソンの議論をもとに、この二つの教育の方向を検討しておこう。

従来より、教育学において人間形成を論じるときの基本的な概念は社会化（socialization）であった。社会化とは、社会の存続にとって必要な秩序の維持のために、成員間に共通の行動様式を身につけさせることである。ただし社会化された個体は、社会の一員としての資格を得ることで、生存のためのさまざまな権利を保障してもらえるようにもなるのだから、それは個体を維持するためのものでもあるといえるだろう。このように社会と個体の保存と維持を目的とする社会化とは、まさに閉じた社会を前提にしたものである。ここではそのような閉じた社会において社会化された人格を、閉じた人格と名づけておこう。

ところで社会化はそれだけで完全なものであるならば、歓迎されこそすれ、批判されるものではない。実際、社会化されることによって、われわれは社会に適応した規律正しい誠実な人間となるであろう。だが、忘れてはならないのは、閉じた社会の本性は、みずからの保存と維持のために、つねに潜在的に外部の敵を想定し、みずからを防衛することをめざすものであったということである。したがって、閉じた社会において社会化された人間も、潜在的に外敵を想定し、みずからの防衛を目的とすることになるだろう。だから閉じた人格はその内部につねに排他性・暴力性をはらんでいるものと思われる。

一方、ベルクソンは開いた社会という概念を提出した。そうするとわれわれは開いた社会に向けての社会化も想定することができるはずである。われわれはこの開いた社会に向けて

の社会化を、超社会化（trans-socialization）と呼んでおこう[17]。それでは超社会化とは一体どのようなものなのか。簡潔にいうならば、それは個体を防衛（自己保存）の彼方へと導くこと、すなわち〈自由＝創造〉へと導くことである。われわれは超社会化された人格を、閉じた人格に対して開いた人格と名づけておこう。

ベルクソンにおいて、個体を防衛の彼方へと導くのは、神秘家の役目であった。しかしこれらの人々ほどの資質がないとしても、その資質をある程度そなえている人物は、みな超社会化の担い手となりうる一人の人格者であるといえるだろう。だからその人格者は親であってもかまわないし、教師であってもかまわない。いずれにせよ、われわれは、彼らの呼びかけを通して、根源的な生命の呼びかけを聞くのである。それはまさに、われわれのうちに、個人の記憶を超えた宇宙の記憶にみあうような力動的図式が作動することを意味する。つまり、そのときわれわれに図式として与えられるのは、まさに生命の意図そのものにほかならないだろう。この図式からイマージュへの働きにおいて、固定した平面で旋回している自己の枠組みはきしみ、新たな自己が生成される。そしてここにわれわれは人格の〈自由＝創造〉を唱えることができるのである。

ところでわれわれは、このように超社会化を唱えることによって、決して社会化の作用を否定しているのではない。なぜならわれわれの社会は、これまでに述べてきたように、二つの記憶に起源をもつからである。すなわち、われわれの社会は人類種の記憶＝所産的自然に起源をもつと同時に、宇宙の記憶＝能産的自然にも起源をもつのだ。だから、われわれの社会の起源の二元性というものを認めるならば、社会化と超社会化は、生命の相補的な二つの作用にすぎないということになるだろう。けれども、われわれがつねに新しいもの、予測のつかないものを生み出し、たえず自分自身を創造していくことができるのは、まず第一に根源的生命（宇宙の記憶）の呼びかけ、すなわち生命の創造的努力、自由を求める生命の推進力に応えるからである。したがって、超社会化なくして、われわれは人格の〈自由＝創造〉を実現することはできないだろう。つまり、開いた社会においてこそ〈自由＝創造〉があるのならば、開いた社会における教育（超社会化）においてこそ真の創造性が現れることになるのである。

✣注

1　H・Bergson, "Essai sur données immédiates de la conscinence"（(平井啓之訳)『時間と自由』(ベルクソン全集１)、白水社、1965). 以下 DI（『試論』）と表記。H・Bergson, "matière et mémoire"

（（田島節夫訳）『物質と記憶』（ベルクソン全集2）、白水社、1965）．以下MM（『記憶』）と表記。H・Bergson, "L'évolution créatrice"（（松浪信三郎・高橋允昭訳）『創造的進化』（ベルクソン全集4）、白水社、1966）．以下ＥＣ（『進化』）と表記。H・Bergson, "Les deux sources de la morale et de la religion"（（中村雄二郎訳）『道徳と宗教の二源泉』（ベルクソン全集6）、白水社、1965）．以下ＭＲ（『二源泉』）と表記。

以上はすべてH・Bergson, "Oeuvres", P. U. F., 1959に所収。

2　G・ドゥルーズ（宇波彰訳）『ベルクソンの哲学』法政大学出版局、1974、61頁。

3　H・Bergson, "L'energie spirituelle"（（渡辺秀訳）『精神のエネルギー』（ベルクソン全集5）、白水社、1965）．以下ＥＳ（『精神力』）と表記。H・Bergson, "Oeuvres", P. U. F., 1959に所収。

4　中村弓子「心身の合一」『受肉の詩学』みすず書房、1995を参照。

5　H・Bergson, ES, p. 957（『精神力』222頁）.

6　G・ドゥルーズ、前掲書、85頁。

7　H・Bergson, EC, p. 588（『進化』134頁）.

8　H・Bergson, ibid., p. 623（同上書、177頁）.

9　H・Bergson, ibid., p. 721（同上書、302頁）.

10　H・Bergson, ibid., p. 645（同上書、204頁）.

11　H・Bergson, ibid., p. 646（同上書、205頁）.

12　H・Bergson, ibid., p. 585（同上書、130頁）.

13　G・ドゥルーズ、前掲書、101－118頁、および前田英樹「解題　度合いとしてのベルクソニスム」H・ベルクソン（G・ドゥルーズ編）『記憶と生』未知谷、1999、254－265頁を参照。

14　H・Bergson, MR, p. 1006（『二源泉』45頁）.

15　H・Bergson, ibid., p.p. 1023-1024（同上書、69頁）.

16　H・Bergson, ibid., p. 1057（同上書、116頁）.

17　超社会化の教育に関しては、亀山佳明「社会化論を超えて」（亀山佳明・麻生武・矢野智司編）『野生の教育をめざして』新曜社、2000、作田啓一「超社会化の存在論的基底」『Becoming』No. 3、1999、矢野智司『自己変容という物語　生成・贈与・教育』金子書房、2000を参照。なお超社会化は亀山の造語である。

✣文献

A・バディウ（鈴木創士訳）『ドゥルーズ　存在の喧騒』河出書房新社、1998。

H・Bergson, "Oeuvres", P. U. F., 1959（『ベルグソン全集』全9巻、白水社、1965-66）.

G・ドゥルーズ（宇波彰訳）『ベルクソンの哲学』法政大学出版局、1974。

M・ハート（田代真・井上摂・浅野俊哉・暮沢剛巳訳）『ドゥルーズの哲学』法政大学出版局、1996。

檜垣立哉『ベルクソンの哲学』勁草書房、2000。

V・ジャンケレヴィッチ（阿部一智・桑田禮彰訳）『アンリ・ベルクソン』新評論、1988。
亀山佳明「社会化論を超えて」（亀山佳明・麻生武・矢野智司編）『野生の教育をめざして』新曜社、2000。
前田英樹「解題　度合いとしてのベルクソニスム」H・ベルクソン（G・ドゥルーズ編）『記憶と生』未知谷、1999。
守永直幹「生命、未知なる同胞　ベルクソンの身体論図式」『現代思想』2月臨時増刊号、2001。
中村弓子『受肉の詩学』みすず書房、1995。
作田啓一『生成の社会学をめざして』有斐閣、1993。
作田啓一『三次元の人間　生成の思想を語る』行路社、1995。
作田啓一「持続する生命」（作田啓一・木田元・亀山佳明・矢野智司編）『人間学命題集』新曜社、1998。
作田啓一「超社会化の存在論的基底」『Becoming』No. 3、1999。
新堂粧子「ベルクソンの持続理論の検討」『京都大学教育学部紀要』第44号、1998。
J.-L. ヴィエイヤール・バロン（上村博訳）『ベルクソン』白水社文庫クセジュ、1993。
矢野智司『自己変容という物語　生成・贈与・教育』金子書房、2000。

（ふじいなつこ　京都大学大学院教育学研究科博士課程）